

カシ(欋)の「呼び名は、材が硬いところから「かたし」が「カシ」になったといわれています。島根県内で見られるカシのなかまには、このアラカシの他にシラカシ、ウラジロガシ、アカガシ、ツクバネガシなどがあります。中でも分布が広く個体数も多いのがこのアラカシで、ちょっと山に入ればどこにでも見られます。

アラカシは、高さ15~25mになるブナ科の常緑高木で、ドングリをつけます。ドングリはブナ科の実(果実)の総称で、カシやシイ、ナラのなかまなどがあります。ドングリには、花をつけたその年に実が熟す(ドングリの形になる)ものと、翌年に熟すものがありますが、アラカシはコナラなどと同様にその年に実をつけ、10月ごろ1.5~2cmのやや丸っぽいドングリをつけます。なお、ドングリのお皿(殻斗)の模様もドングリの仲間を見分けるポイントとなります。カシのなかまはお皿にリング状の横しماがあるのが特徴で、アラカシは深いお椀型で7~10段のリングが見られます。

本州(宮城・石川県以西)、四国、九州、沖縄に分布するほか、濟州島や中国、台湾、東南アジア、ヒマラヤなど、その分布は大変広いことが分かっています。生け垣や庭木、公園木などとしてもよく植えられているので、目にする機会が多いカシの木です。なお、島根県内の山野に自生しているアラカシの葉の形と、公園などに植えられている他の地域から持ち込まれたアラカシの葉の形は、微妙に違っていますので、比べてみるとおもしろいでしょう。なお、他の地域では、この実でカシ豆腐を作るところもあります。



▲ アラカシの葉と新芽



▲ アラカシのドングリ